

小田急線上部利用シンポジウムの記録(概要版)

2012年4月12日 19:00~21:00

北沢タウンホール 12階スカイサロン

区長挨拶

- ・ 最初に広い会場が確保できなかったため、映像で複数の会場で実施することになったことをお詫びしたい。
- ・ 小田急線の上部利用について私が区長に就任する前から区民のみなさんから様々な案をいただいていた。何故、今日のシンポジウムを開催することにしたかという東日本大震災を経験した日本社会がどのように変わってきたのか？いろいろ取り組んできたが、都市空間が非常にもろいものだとということがわかった。また、自治体行政としても、第一に防災を考えようということがわかった。これは震災前も考えてきたことだが、これまでの発想や常識を取り払って考えていきたいと考えている。
- ・ 上部空間の 2.2km という空間をどう考えていくのか、パネリストのみなさんと考えていきたい。
- ・ また、行政として、高齢者の居場所、介護の支援、少子化社会対策、子育てのスペース確保に取り組んでいるが、十分な空地がない。ゆっくり歩けることや、安心して子育てできる空間を考えることは大切である。
- ・ 震災を経たからこそ変わる、2.2km の空間へのいろんな叢智を集め、鉄道事業者と考えていきたいと思っている。

基調講演 涌井史郎(雅之)氏(東京都市大学教授)

本来は、この場に私がふさわしくないのではと思っている。まちづくりについては、小林先生を中核として様々な議論を積みかさねてきているのを見て感動している。区長と話し合っ、東日本大震災を経て我々の哲学をどうすべきかという視点で話をすることにした。

国連生物多様性の10年の国内委員会の委員長代理という立場でもあり、リオ+20で子供達を連れて行く立場である。

この下北沢の物語は、内向きの話ではなく、世界の物語につながるという視点で話をしたい。

「レジリエンス = 自己回復能力」が重要

- ・ 「レジリエンス = 自己回復能力」という言葉がこれから非常に重要である。
- ・ 20年前の1992年。リオに世界の首脳があつまり「地球環境サミット(環境と開発に関する国際連合会議)」が開催された。この会議は一時膠着状態になっていたが、12歳の少女セヴァン・スズキが名演説をしてこの状況を救った事は有名である。「大人たちは、私たちに壊したら直せないものがあると言っておきながら、平気でそれを壊しているのはなぜ？」という問いかけのもと、

「これ以上砂漠化を進行させないこと」、「熱帯雨林を切るようなライフスタイルは否定していこうということ」、「生物多様性を保全していくこと」、そして「気候変動を抑制していくこと」という「4つの約束」がかわされたがいまだ守られていない。

- ・ 今年開催される「国連持続可能な開発会議（リオ+20）」のテーマは「グリーン」である。
- ・ 地球の生命圏は半径 6400km の中でたったの 30km である。直径 20cm で地球を描いたらたったの 0.5mm。この生命圏が私たちを支えている。地球 46 億年の歴史の中で生命圏ができたのは 38 億年前。1 年の暦にすると 4 月の末に生命が誕生して 7 月から 8 月にかけて酸素を出す大量の生物が生まれ進化をした。我々人類が出現したのは 12 月 27 日から 28 日。産業革命が 12 月 31 日の 23:59 になる。我々人類はあとから出てきてたったの 2 秒間で地球のシステムを壊そうとしている！
- ・ エコロジカル・フットプリントという考え方がある。もし地球すべての人が日本人並の暮らしを続けるためには 2.4 個の地球が必要と言われている。

東日本大震災をうけて、何を考えていくべきか？

- ・ 今、防災ではなく「減災」、そして災害があった時にそれを克服する力「克災」を考えることが問われている！まさにレジリエンス（自己回復能力）が問われている。
- ・ 869 年以来日本は非常にたくさんの津波にあっている。ここ 50 年でも三陸地方ではたびたび津波があったが、ここが故郷だと考え、住民はまさに克災に取り組んできた歴史であった。
- ・ そこにもう一つ福島原発の問題が起こった。これは産業革命以来、人間が自然との関係を断ち切った結果がこの事故に表れたのではないか？
- ・ 3.11 の東日本大震災と、9.11 にも共通点がある。地球上の多様な自然や、ライフスタイル、文化を否定し、無理矢理アメリカン・スタンダードをグローバル・スタンダードとして一つにしようという謙虚さに欠いた結果だったのではないだろうか？！多様性を一つにできるという錯誤が招いた悲劇である。

新しいライフスタイルのために、既往の概念の打破が必要な時代に！

- ・ 「ルビンの壺」という絵がある。壺にも見えるし、人が向かいあっているようにも見える。見方によって違うんだということを認識し、既往の概念を捨てなくてはならない時期にきているのではないか。
- ・ 農業革命、産業革命に続く第三の革命「環境革命」が起きようとしている。今までは豊かさを追い求めてきた社会だった。しかし限界がある以上はもう

追い求めることはできない。

- ・ 「どのように豊かさを深めていくのか？」これがまちづくりに必要な視点だ。無限を前提にした発想ではなく、有限な資源の中でいかに豊かなバランスを考えるのかという事。将来世代から私たちが奪うだけではないというバランス。このことが持続的な未来を考える上で重要である。つまり利益結合型社会から、地縁結合型社会に移行しコミュニティをいかに大切にしていくのかである。
- ・ 「新しいライフスタイル」とは「健康+生きがい×未来×環境」である。
- ・ NHK に相談されて、新番組の企画として「ぶらぶら歩く番組」を提案した。今まで我々は時速 120km の社会を目指してきたが、時速 3 km だから見えるものがたくさんある。これが豊かさを深める解ではないか。これが「プラタモリ」という番組になった。

自然を取り入れ、いなす日本の知恵

- ・ ヨーロッパは産業優先型社会。合理性を重視し、城壁で都市と自然を切り離れた。その結果 1000 年で緑が減った。
- ・ 一方、日本は城壁で都市を区切ってはならず、みどりの中の入れ子という構造を持つ都市である。まさにレジリエンスな空間モデルと言える。江戸は 100 万都市でありながら生態環境都市だった。それは日本の国土の厳しい特質が生み出したといっても過言ではない。水脈はあつと言う間に海に流れ出てしまうため、毛細血管のような地球 10 周分と言われる農業用水網を作り、農業の基盤を作った。一方、小さな国土で地震の多くを引き受けているという厳しい状況がある。
- ・ しかし日本には自然の力を「いなす」という知恵がある。それが我が国の伝統的匠の技として生きている。日本の美しい自然景観は、厳しい自然災害～火山と水と風により生まれたものである。自然と闘いながら安心安全に暮らす知恵を学び、棲み分ける知恵、自然を読む力を身に付け、緑の効用を最大限に活かすことで培われたものである。自然を押しさえ込むのではなく「いなす」ことをしてきた。
- ・ 例えば、武田信玄の信玄堤では、洪水を堤防の中に収めず、水の勢いは抑えて、あふれた水は堤防を切って河畔林という林で恐察物をすべて取り除き、養分のあった水を取り込んで農業に活用するという知恵を持っていた。
- ・ 東京タワーとスカイツリーを比較すると「いなし」の技術の極意がわかる。東京タワーはふんばる構造であるため、震災で先が曲がってしまった。一方スカイツリーは五重塔の伝統的な木造軸組工法をとりいれているためしっかり建っている。

- ・ このように、多発する自然災害に向き合うことで、日本人はレジリエンスな構造を知恵として身につけてきた。しかし、マッカーサーが上陸して以来、ヘンリーフォードによるモータリゼーションの考え方により、都市はスプロールし、里山などの緑を奪ってしまうことになった。その結果、様々な問題が起こった。1981年からたった9年間で都市が熱帯夜に悩まされるようになった。日本の大都市の平均気温が2~3 上昇した。

車社会を否定し、環境とコミュニティを活かすコンパクトな都市へ

- ・ 都市は「エネルギー」、「エンバロメント（環境）」、「エコノミー（経済）」というEではじまる3つのジレンマならぬトレリンマに陥っている。そこで生まれたのが「トリプルボトムライン」という考え方である。その一番の特効薬は自動車社会を否定すること。モータリゼーションという考え方をモーダルシフトという考え方で考えると、トラックで1tの荷物を運ぶのにCO₂の排出量は、内向海運は1/4、鉄道では1/8という結果となる。ha 辺りの人口をできるだけ低くして自然の中に街をつくっていくことが田園都市の思想は間違っていた。むしろ適度にコンパクトに集約された都市の方がいいのだと。世界で人気の都市バルセロナは400人/ha。人口が適度に密集していて、職住一体となった機能複合の都市を目指す時がきた。その肝は「環境」と「コミュニティ」である。
- ・ アメリカでは1991年に「ニューアーバニズム宣言」という新たな方向を打ち出している。アメリカの都市の崩壊現象は、自動車に過度な依存したエネルギー大量消費型都市づくりに起因している。解決策として、自動車への依存を減らし、生態系に配慮し、なによりも人々が居住するコミュニティに対し強い帰属意識と誇りが持てるような都市の創造こそが未来の都市だと宣言している。まさに下北沢を考えた時の、この方向をどう考えていくのかが大事である。

下北沢で目指す新しいライフスタイルとは？

- ・ 我々は下北沢でどんな新しいライフスタイルを創造するのかを問われている。ヘンリーフォードは歩くことから自動車へライフスタイルの転換をした。スティーブ・ジョブスは、情報端末を「座って打つもの」からフリーフォールドにして、触ってめくるようにした。我々は都市についてもライフスタイルの転換を大きく図らざるを得ない。パリの市長は2選目の時に第2のアンシャンレジューム（フランス革命以前の旧体制）を打破すると言った。王権から市民を開放したのが第1のフランス革命。自分が市長に当選したら車から市民を開放すると言って、「ベリブ」という大規模貸し自転車事業のシステ

ムを導入し、自動車の利用は3割も減り、安心してパリの中を歩けるようになった。

- ・ NY では、最も治安の悪いところの線路跡地～ハドソン川に面したウエストハイウェイから5番街に至るところ～を、ふるさとの象徴として市民自らが管理する事を前提に「ハイレイン」をつくって見事によみがえらせた。
- ・ 日本では私が首都高に話をして、大橋ジャンクションに屋上庭園につくり再開のマンションから自由にアクセスできるようにすることを提案した。これを受けて、首都高の費用で目黒区の運営による公園がオープン予定である。
- ・ 世界は変わりはじめているが、日本の災害の特性は変わらない。関東大震災の恐ろしい記憶はその後のまちづくりに活かされてきた。これは世田谷も無縁ではない。東急や小田急、京王などの私鉄は帝都復興計画に則って多摩川の砂利を採るために敷かれたものだった。田園調布は元々市川の方がいい住宅街だったが、震災で壊滅し今の場所に戻ってきた。烏山寺町は下町のお寺が震災で焼き出されて、烏山に集団移転してきた。世田谷の発展はこうした災害と無縁ではないことを覚えておく必要がある。
- ・ もともと我々の先輩は愚かではなかった。環八のあたりにはグリーンベルトということで植木屋が集まっていた。それが車の発展とともに環八ができてしまった。モータリゼーションによって、産業優先社会によってこの計画が食いつぶされた。昔はレジリエンスな世の中をつくるのかを考えていたのにつぶされてきてしまった。
- ・ 私は国営で防災公園をつくるべきだと主張して、有明に国営東京臨海広域防災公園「そなエリア」をつくった。被災時に実戦部隊が全てここに集まってさまざまな救援活動ができる公園だ。みどりや公園のスペースは発災時にも復旧時も重要である。

カオスと静謐な暮らしが混在する下北沢は危険と隣り合わせ

～防災面からの転換の鍵を握る上部利用の可能性～

- ・ 下北沢は災害に対する課題が非常に多いが、もし小田急線の上部跡地を防災に利用できる可能性があるのならば、どうやってここを活用してレジリエンスなまちにつくり変えていくのかを考える必要がある。
- ・ 私の個人的な見解であるが、下北沢の魅力は混沌としたダイナミズムと静謐な暮らしの共存である。しかしカオス的魅力とカオス故の危うさが背中あわせになっている。これをどのように転換への叡智を働かせるのか。良さを失わずにこの地区を魅力的なまちにするのかを問われている。そのキーワードは小田急線の上部利用である。
- ・ 豊かさを深める時代には、コミュニティの再生が必要。そのためにはみどり

こそが繋ぎ手になる。

- ・ また何故、江戸に祭りが多いのかというと、お祭りは平時の防災訓練だったから。狭い路地に山車や神輿がきて普段より多くの人が集まる。それをそれぞれのまちのコミュニティの役割分担で支えてきた。災害の多い江戸であるからこそこの発想だ。
- ・ いかに関係が複雑な要件をかみあわせて、誇り高くかつ安全で個性的なまちを皆さんが作りだそうとするか。ここからは私が語ることはない。以上を話題提供とさせていただきたいと思う。

パネルディスカッション

小林正美氏(明治大学教授)

私は大学院を出た後、都庁を設計した丹下賢三の事務所に勤め、海外のまちづくりを経験し、ハーバード大学でボストンの古いまちの保存と経済の活性化をバランスよく考えること、住民参加、専門家がまちづくりに公平に関わること、対立する利害関係に時間をかけてミティゲーション（調停）していくことなどを勉強してきた。その後代沢2丁目に設計事務所を開設。2004年ぐらいから道路問題、地区計画の話が出てきて、専門家としてアドバイスを求められたりして今に至っている。アメリカで学んできたことが目の前で試されるという貴重な経験をさせてもらっている。

専門家の立場で市民グループの人が下北沢で活動してきた経緯を説明し、本日お配りしているグリーンラインの案について説明したい。

- ・ 2004～2006年：下北沢フォーラム（専門家を中心としたグループ）
専門家と学生が中心で、ハーバード大学の学生や、慶應大の学生と上部利用計画を考えた。「沿線の種地をのみこむ」という発想の提案や、車の中に入れられないリングロードという道を設け、その中は自転車と歩きにするという案などが出た。また、クリチバ市の市長をやられた都市デザイナーにも案をもらった。公園を上部に、下に劇場などの文化施設や商業施設の2層構造にするような、今考えてみると面白い提案をもらった。
- ・ 2007～2011年：小田急線あとの会（市民を中心としたグループ）
2008年からセミナーやワークショップを開催した。国内学生によるシャレットワークショップを行い具体的な案を検討した。スピードが出せる緊急自動車のための太い道と、ある程度

スピードが出る自転車の道と、ゆっくり歩きたい人というスピードの違う移動を包含できる空間のネットワークが重要だと思った。

区の市民からのアイデア募集をするように要請し、みんなで応募した。専門家検討委員会による案の検討もした。

・2011年～ : グリーンライン下北沢(みんなのグループ)

昨年、鉄道あとちがあとちではなくなる未来に向けて、小田急電鉄さんともウィン・ウィンになれる生活が豊かになれるような生活空間を考えたいということで、グループの名前を変えた。国土交通省「住まいまちづくり担い手事業」の支援団体として選定され、専門家と市民が集まるみんなのグループとして勉強会やワークショップを重ねてきた。勉強会ではNYのハイラインやランドスケープ、公共空間の活用等について学んできた。様々なアイデアを募集して、専門家や学生が空間に表すというシャレットワークショップを開き、2月7日に区長に提言書を提出した。

グリーンラインの提案について

上部利用を考える上で「ハイライン」は魅力的なモデル。「グリーン(エコロジカル)」という考え方で次の8つのヴィジョンをまとめた。

安心・安全・防災に配慮した地域全体の「連続性」

地域独自の歴史、文化や境界の特徴を生かした空間

いのちを守り地域を育む、連続した緑のランドスケープ

あらゆる人々が楽しめるユニバーサルデザインで施設と情報を提供

まちとつながり楽しく歩ける回遊空間

「鉄道の記憶」「駅前市場のDNA」は歴史を引き継ぐキーワード

次の世代に引継ぐ魅力ある公共空間を創造し、守り育てる

持続可能(サステナブル)なまちを支えるエコロジカルパーク

またコンセプトは「グリーン(エコロジカル)なコンパクトシティの中に農園、文化、アートデザイン、防災、生活、商業等をみんなでどうやって育てるか(～ing)」ということである。

- ・ いろいろものつくってしまうと10～20年ですぐ陳腐化するものもあるのでフレームワークを考えた。枠組みに入れるものは入れ替え自由なものにしようという発想。レジリエンスというか、フレキシブルな考え方。
- ・ この提案の絵はあくまで参加者それぞれの理想をつなげたものである。実際には小田急電鉄が管理するところ、区が管理するところ、市民が自主管理す

るかもしれないところがあるのだが、市民にとっては、どこがどこの持ち物かではなく、すべてがつながったシームレスな空間であることが大事であると考えまとめている。

- ・ 2.2km というのは金太郎飴のようにどこを切っても同じというのではなく、商業地が真ん中にあり、そして住宅地がある。それぞれの地区の特徴や住まわれている方の考えなどを受けていくと、簡単にひとつではいけないということも大事な点だと思う。

めざすことは一緒！企業と市民と行政が話し合う場が大事

- ・ 成熟市民社会として豊かに住むまちを考えていくには、これから企業と市民と行政がまじめに話し合う必要がある。小田急電鉄のホームページには文化、にぎわい、子育てを大切に考えている。また、沿線自然ふれあい歩道を各駅で考えている。基本的には私たちと同じ方向を見ていると思う。
- ・ 小田急カルチュラルパークなどと名付けて、世界から注目され、なおかつ住みやすく安全なまちができたらいいなと思う。
- ・ 今、私は基本構想審議会という会議に入っているが、職住近接というキーワードや、震災後は地域が自分たちで支える社会システム。地域でみんなが当事者意識を持ってマネジメントするソーシャルデザイン。それぞれの地域で目指していくことが、それこそレジリエンスなまちになるのではないか。
- ・ 今後、グリーンライン下北沢は下北沢学校をはじめ自分たちのまちをいかに自分たちで運営していくことができるのかを勉強している。
- ・ メンバーの一人が言った言葉だが、「今は暗い時代であるが、ある夢に向かってみんなで計画したり話し合ったりすることこそが明るくなれるきっかけではないか。」という。すごくいいことを聞いたと思った。

区長

- ・ このグリーンラインのきれいなパンフレットにまとめた提案には長い経緯があったことがわかった。
- ・ 世田谷区は 20 年前から「住民参加のまちづくり」を合い言葉にさまざまな取り組みを目指してきた歴史があり、当時の意欲的な取り組みも残っている。
- ・ しかし利益結合型、効率優先という視点から、それを軽視してしまった時期があるのかという気もする。
- ・ 他の地域より住民がまちづくりに参加しようという NPO や任意団体がいる。緑道を地域の団体が世話をしてくれている。何を植えるかということから参加のワークショップで作り上げてきたときく。このような市民参加が世田谷の財産だと思う。

- ・ 次に柴田さんに、世田谷線の山下駅にあったコーヒーショップ跡に、「たまでんカフェ山下」という拠点を置き、地域と東急電鉄と連携しながら活動しているとご経験からお話をいただきたい。

柴田真希氏（NPO 法人まちこらぼ理事長）

- ・ 私は豪徳寺に住んでいて、下北沢のまちづくりには関わってこなかったのですが、外部の目線で東急電鉄と関わってきた取り組みについてお話したい。
- ・ 「えんどう豆型まちづくり」ということで、駅を豆と例え、沿線を地域で包んでいくというコンセプトで、東急電鉄と地域がまちづくりを進めてきた。
- ・ 東急世田谷線の沿線を活性化したいということで活動がはじまったが、はじめは「駅の脇の空き地にトイレがほしい」とか、「駅舎を活用したい」とか、東急電鉄への陳情会議になってしまい話がすすまなかった。
- ・ そこで、2003年に「世田谷線をよくする会」を立ち上げ、2007年の「たまでん 100周年」をみんなでもりあげようという活動をはじめた。
- ・ そして沿線をどうするという事よりもっと大きな視野に立とうと言う事で、学識経験者も迎えて「私たちは“自立した真に豊かなせたがや”を目指します。」という「世田谷ルネサンス宣言」をまとめた。具体的には 住みやすい・子育てしやすい・働きやすいまちの形成、 かけがえのない「地域資源」の多様な活用と価値創造、「世田谷線」を地域固有の資源・財産として認識というものだ。
- ・ 活動の基本理念としては、沿線のアイデンティティの強化のために「えんどう豆構想」という考え方をした。各駅周辺で様々な主体が個性を発揮することで沿線の回遊性を高め、統一的イメージを与える接着剤として「世田谷線」を活用しようという発想である。協働の活動を継続することで、関係者感の共有の価値が生まれるだろう。
- ・ こうして玉電 100周年イベントを地域と東急が一緒につくりあげた。
- ・ またこのイベントの実施にあたって NPO 法人まちこらぼを立ち上げ、東急と商店街のつなぎ役として動いた。玉電シンポジウムや玉電ウォーキングなど実施された。
- ・ 100周年記念の後も続けようということで、商店街でつまみぐいしながら沿線 5 km、10 駅、11 商店街を歩くという、「つまみぐいウォーキング」というイベントを翌年から実施した。
- ・ そして沿線の代表者が集まった会議体が生まれた。
- ・ 「コラボレート・クリーン大作戦」は、年 4 回、駅周辺を同時に掃除するイベント。住民は駅周辺を、東急の職員は線路周辺を掃除している。
- ・ 「沿線イベント」は、個々に行われているイベントをつないで、一つのイベ

ントとして吊り広告で宣伝している。この吊り広告は沿線の小学生に絵を描いてもらっているものもある。

- ・ 山下駅には記念樹と花壇をつくり、東急電鉄と区と連携して花植えをしている。また、三軒茶屋駅長室にミミズコンポストを設置し、エコな循環のしくみなども検討している。
- ・ 「たまでんカフェ山下」は、山下駅に、商店街や世田谷線をよくする会や、NPO が集まり、せたがやトラストまちづくりの「まちづくりファンド」の拠点事業に応募して 500 万円の助成金を受けて改修し、コミュニティカフェをオープンした。地域の人が学び、集う場として運営している。
- ・ 東急との協働の事例を話したが、このような協働のまちづくりが、世田谷線だけではなく、小田急線や井の頭線沿線でも進めば、これらを結ぶ5角型「世田谷ゴールデン・ペンタゴン」という広がりにもなるのではないだろうか。
- ・ 我々は東急電鉄さんとかなりコミュニケーションをとってきた。東急さんと地域とで、時間的にも場所的にもいろいろな事を共有し、同じ方向を向くという事を 10 年くらい確かめあいながら進めてきたことが重要だったと思う。

区長

- ・ 沿線で 10 年にわたり、いろいろ取り組まれてきたことはとても興味深い。
- ・ 次は地元で、北沢 2 丁目協和会の会長をされている玉利さんからお話を伺いたい。

玉利久江氏（北沢 2 丁目協和会会長）

- ・ 北沢 2 丁目協和会会長をやっている。結婚して 37 年。子どもの PTA 活動の延長線上にこの活動がある。
- ・ 私たちの町会は H23 年時点で 803 所帯あり半数が単身所帯。代々住み続けている方から、ビルに建て直し下を店舗に住居を上にも構え住み続ける方、外部の方がマンションを建て管理会社が管理するもの等いろいろ。
- ・ 地域の中には一人暮らしや夫婦で高齢者の方は大勢いる。託児所や保育園等就学前の子どもが 100 人はいるので、大地震が起きた時のことが心配である。
- ・ 住宅地の中にお店ができ、毎日がお祭りのよう。一方、騒音、ごみ、自転車、落書きの問題が住民を悩ませているのも事実。
- ・ この地域の課題は、公園や空き地がないこと。防災倉庫を置くスペースも隣の町会から借りている。町会としての備蓄もできていない。いざという時に必要なものを取りに行くのも大変。
- ・ 平成 20 年 10 月に、前会長が区に提出した小田急の上部利用について町会としての考えを発表したい。

歩行者用通路、遊歩道、防火帯が必要。そのためにはどんな植栽にするか配慮が必要。みどりは四季が楽しめる程度でよいと考える。

駐輪場は駅に隣接してほしい。駅から離れすぎると住宅地の不法駐輪が改善されない。

下北沢と東北沢の中間辺りにベンチとトイレのある公園がほしい。

- ・このような地域の声を受けて、第6回の上部利用通信で区の上部利用検討の中で案に盛り込まれたことは感謝している。
- ・また、3月11日を経た防災面の強化として、更にお願ひしたいことがある。
 - 防災倉庫を使いやすい場に移動したい。
 - 一時集合所を広く見通しのよい上部の場所に移動したい。
 - マンホールトイレを設置し、非常時にすぐに使えるものにしたい。
- ・地元としてはすぐに使えるようなものとしての活用を望んでいる。
- ・下北沢のまちを、明るく親切で便利で使い勝手のいいまちとして、将来も発展して行ってほしい。いつまでも住み続けられるまちづくりを考えていく上で、今までお願ひしてきたことを早く実現させてほしい。地域の住民や商店街がこの問題にかけてきた時間は相当な時間。早く結論を出していただくことを重ねてお願ひしたい。

区長

- ・やはり3月11日を経てマンホールトイレなど防災の機能についても、とても身近な問題意識になっていると感じた。
- ・最後に柏さんにお願ひしたい。しもきた商店街振興組合理事長という立場で長年考えられてきたと思う。現在地下化が進む中、上部利用についてもまとめていく時期に入っていると思う。柏さんは下北沢大学などの催しもされている。こうした商店街の視点からお話いただきたい。

柏雅康氏（しもきた商店街振興組合理事長）

- ・しもきた商店街振興組合理事長をしており、駅周辺の商店街の立場から話をしたい。
- ・まさに上部利用のエリアで生まれて育った。祖父の代から商売し、まちづくり活動にも携わってきた。私が小学生の頃から祖父に小田急線は高架になると聞いて育ってきた（当時は高架案が主流だったので）が、現実的には私の代になってはじめて工事がはじまった。できれば地元としては自分の代で終わらせたいと思い活動している。工事を遅らせないで、早急に工事を完成させてほしい。仮囲いのまちが続いては来街者が減ってまちが死んでしまう。
- ・小田急線が地下化されることについては地元としても大いに期待している。

- ・ 工事期間中にも多くの方にまちに来てもらうためにいろいろなイベントを開催している。「下北沢大学」では、有名なファッションデザインの専門学校と連携してまちの回りやすさ、にぎわいの視点から商店街を考えている。
- ・ まちの回遊性については特に大切だ。小田原方面の新改札口の設置にも賛成してきた。北口駅前商店街としては、新たな場所に改札ができるのがどうかと思ったが、まちの回遊性を高めることでもっと魅力的なまちになると思う。
- ・ 「下北沢大学」を通して専門学校生や、大学の卒論のお手伝いで、数十名の20～30代の学生と話す機会があったが、下北沢に来たのが「はじめて」「2回目程度」という声が多くてびっくりした。もっと回遊性を高めて若者が来たくするような魅力的なまちにしていきたい。
- ・ 子連れのお客さんを見かけないということから、“こどもも楽しい”まちにしようという話になった。「ちびっこ天狗道中」という10年以上続くイベントは、景品やまちで隊列を組む都合で先着200名としたところ受付がすぐ満員になった。「KIDS ハロウィン」には申込制限を設けなかったら750名もの参加があった。両親を含めると当日2000人近い参加になるイベントになった。
- ・ 商店街診断で、データを取っているが、今年の2月の報告書を読むと、下北沢エリアに14才以下の子供が2000人弱だということがわかった。それしか住んでないのかと思った。もっとこどもが住める環境を作っていただきたい。
- ・ また、4つの商店街がひとつのまちのようになり、回遊性を高めていけると良い。クリエイティブな下北沢らしさに配慮した賑わいを作ってもらいたい。
- ・ 世田谷まちなか観光フォーラムで出たことば「『住んでよし、訪れてよし』のまち歩き観光。それを支えるのは地域に名指した元気な商店街」とあった。商店街として努力していきたいので、区には協力してもらいたい。
- ・ 上部利用でみどりを豊かにという話が出ている。みどりはとても大事だが、治安・騒音の問題など、維持・管理の事もしっかり考える必要がある。
- ・ 商店街は、駅前広場の高低差の問題について3年間区と話し合ってきた。一緒に勉強し、私どもの想いを区の職員にはしっかり聞いてもらい行動してもらえた。その時、いいまちにしたい想いは一緒！！だと思った。

区長

- ・ お二人の話にもできるだけ早くという時間との戦いの話があった。一方で涌井先生には産業革命以降の価値軸を転換していこうという大きな時間の話があった。4人のパネリストの話を受けて、涌井先生からお話をいただきたい。

涌井史郎(雅之)氏

- ・ 非常に現実的な問題で悩まれていることがわかった。しかし、私の経験でいうと渋谷の例で考えてみてほしい。渋谷というまちは、下北沢によく似ている。松濤や南平台というハイエンドな住宅があり、かつては東大の農学部ができ、陸軍海軍専用のレストランがあり、与謝野鉄幹や晶子や八チ公の先生もいた。それでいて、円山という芸者街もありドブ板横町もあるような混沌としたまちだった。
- ・ それをどうしたかというところまず東急が西武を呼んだ。東急だけでは渋谷は魅力的ではないということで。まさに先ほどの商店街北口の回遊性の話。しかし西武とは真正面の戦いになってしまった。NHK が来て公園通りができてことで東急本店にはなかなか人がきてもらえない。「250m のハザード」というものがあり、雨がふるとなかなか歩いてもらえない。そこで 109 のところに横町の雰囲気がある店をつくり、そこを中継ぎにしてもらおう。さらに bunkamura をつくり、洒落たカフェやクラブをつくった。
- ・ そしてヒカリエをつくってハイエンドな街をつくった。これだけではダメでさらに奥行きになるものが必要だと二子玉川の開発に力を入れている。
- ・ このように戦略的なまちづくりを続けている。
- ・ まちの魅力は代官山のように、駅からだいたい 300 ~ 400m の第 1 種住専のあたりに洒落たレストラン・ブティックがあること。
- ・ それ以上に大切なことは環境だ。神戸の矢田市長と話していたが、大黒公園のたった 10 本のクスノキのおかげで街の延焼が防がれた。そういう空間をつくっていくことが大事である。
- ・ これから 10 年の下北沢ではなく、50 年後を見据えたまちをつくっていくことが非常に重要だと、みなさんの話をきいてしみじみ確認できた。
- ・ 今日は地に足がついた意見を聞けて、私自身も非常に勉強になった。

ファシリテーター(共通しているキーワード)

- ・ 小林先生の話の中では、下北沢フォーラムからあとの会、グリーンライン下北沢という流れの中で、専門家と市民が「想いを像として提案してきた」という話をいただいた。全体がシームレスにつながった連続した空間であることが大事ということだ。その時に企業と市民と行政がまじめに話し合っていく必要があるのではないか。対立の関係ではなく、めざすことは一緒なのではないかというキーワードがあった。
- ・ このキーワードは柴田さんの話の中にもあった。柴田さんは「えんどう豆型まちづくり」ということで、東急電鉄さんと地域が 10 年かけて話し合ってきた話だった。最初は要望型だったが、世田谷ルネサンスや、玉電 100 周年

というまちづくりの目的を企業と地域が確かめあい、同じ方向を向いてきたことによっていろいろなことが実現した。目指す事をどう確かめあっていくのかというプロセスの大切さを示してもらったと思う。

- ・ 玉利さんからは、町会の視点から上部利用に対するたくさんの想いが出され、それが区の上部利用案に盛り込まれてきたということ。そして地元としてはそれを早く実現してほしい!という話をいただいた。
- ・ この「早く」というキーワードは同じ地元である柏さんにもつながる。工事を遅らせないでほしい。仮囲いでは来街者が減ってしまう。自分の代で終わらせたいという話をいただいた。それと共に、いいまちにしたいという想いは一緒だというキーワードをいただいた。
- ・ みなさんの話を通して、いかに問題を共有していくか、いいまちにしたい思いを共有していくのか?という共通するキーワードをいただいたと思う。
- ・ また、みどりの環境づくりについては、みどりの空間が大切だという話と同時に、地元の目線の中では、歩く障害にならないもの、治安の問題等も含めて管理の視点からもとらえてほしいという意見もあった。このような事も含めて涌井先生の話にあるように 50 年後を見据えたまちづくりを考えていくことも大事という話になったかと思う。

区長

最後に一言ずつパネリストの方からも意見をいただきたい。

小林正美氏

- ・ 少し専門的な話をすると、跡地の用途地域には住宅地がかなりあり、今後どういうエリアにしていくかというビジョンが必要。そこを商業化すると周りの住宅の方はいやがるとか、商店の上に人が住む立体的な施設とか。その辺を小田急さんがどのようなイメージを持っているのか、区がどのようなものを出していくのか。あるいは、立体的に上が公園で下が施設である等、いろいろな事を検討するチャンスがまだまだあると思う。
- ・ ひとつだけ専門家として懸念するのは、この計画をみんなでまじめに取り組んでいくと間違いなく成功すると思うが、一方で周りの不動産価値はハイラインもそうだが間違いなく上がるだろう。それが下北沢のまちにとっていいことなのか?いきすぎてはいけないと思う。
- ・ NY のソーホーも、昔はジェントリフィケーションといって、活性化したことは良かったのだが、いきすぎて賃料が上がって大手のチェーンが入ってアーティストが出て行ってしまった。こういうことになると下北沢らしくなくなってしまうかもしれない。そういうコントロールは行政を含めて必要では

ないか。今までのまちづくりは、市民の知らないところでできていってしまうことが多い。こういうオープンな場で議論しながらまちづくりを進めていなくては、日本は変わっていかないと思う。

区長

- ・ 柴田さんからは、東急電鉄との協議を通して、沿線エリア全体をえんどう豆という形でつつんで、活性化していこうという話をいただいた。その中に参加でつくっていくということがあった。行政もちろん関わっていくが、住民自らが主体的にまちをよくしていこうという話があったのでその点について一言お願いしたい。

柴田真希氏

- ・ たまでんカフェ山下を借りるに当たって、東急電鉄と5年間話し合ってきた。普通の賃貸ではNPOが借りるにはとても高いので、どのくらい引き下げてくれるのかを交渉してきた。そして改修費を自分で調達するならということで許可が降りた。それでも公的な意味合いがないと貸せないということだったので、先ほどの話のように地元の団体と連携して応募した。花壇についても東京都の都市緑化基金からお金をいただいているなど、東急からの援助ではなく、自力でお金を調達してやってきている。
- ・ 最初はみんな頑張ってお金を集めてこよう！ということになるが、自分たちの事業をやりながら継続するのは非常に大変！！
- ・ 企業と協働で何かをやろうという時は、住んでいる人が汗をかきながら自分たちでやっていくんだという気持ちがないとダメ。NPOと地元と一緒に活動することが、お互いの活動につながることを認識しておくことが大事。

区長

- ・ 玉利さんに伺いたい。地域の視点において、どのくらい今の状況が伝わっているのか？

玉利久江氏

- ・ 当町会は、この上部利用について回覧板やポスティングで認知度が高い町会だと思う。状況を静観しながら、早く進めてほしいと希望している人が多いと思う。

区長

- ・ 柏さんに伺いたい。地元では早くという視点があるが、その反面、防災・減

災の視点においても、しっかり時間をかけて考えていくことの必要性も感じている。その点についてどう思うか？

柏雅康氏

- ・ さきほど小林先生が小田急のホームページの話がされたことを聞くと、考えがそんなに小田急電鉄とズレていないと思う。
- ・ 京王線の工事をはじめ、マーケットが一部仮囲いになっている。知らない人からみたらシャッター通りになっていると思われても仕方がなく、そのような状態が何年も続くのは不安である。
- ・ 商店街でも年長の方が商売を次の世代に継がせていいのか悩んでいる。自分たちの将来設計を描けないというのは商売をする者にとって非常に不安である。いいものをつくっていきたい思いはあるが、40年以上影響を受けている立場としては、このもどかしさは早く解消していただきたいと思う。

11F 意見

- ・ 上部利用の問題は今始まったばかりだと思う。私（地元住民）としては時間がかかっても世界に誇れる素晴らしい都市空間になってほしい。（ただの地元の要望が盛り込まれた案でなく）
- ・ 商業、区民、行政が一体となって日本を代表となる計画としたい。企業と積極的に連携すべき
- ・ 涌井先生のお話では大変広い視野で将来的な考え方を示してくださり、大変勉強になりました。出席して良かったです。
- ・ 下北跡地上部利用は是非実現させたい。
- ・ 自然との共生（緑部分多く）
- ・ 地域住民 / 行政 / 小田急等の共生
- ・ 幼児から老人まで快適に過ごせる街を目指し、推進してもらいたい。
- ・ 色んな意見がでましたが、住民の方がこれだけ真剣に街の未来について考えられ、集まっているということが重要だと感じました。
- ・ いい街にしたいという思いは一緒なので、下北の未来は問題ないとおもいました。「住民が街の未来に考えることは大事」
- ・ 小田急線上部利用の提案は今回示された内容では盛りだくさん過ぎると思います。広い芝生のみ（ベンチ付き）で多目的利用できる（防災にも可）公園を造ることを望みます。
- ・ みどりと管理、治安の問題 どう解決するのか？
- ・ まちづくりのコンセプトを明確に商業地とするのか文教地とするのか？
- ・ 歩行者と車の区分を強力に推進してほしい。曜日、時間帯で区分。

区長

- ・ 涌井さんの話にあるように大きな転換期になると思う。車から人優先に。オープンカフェとか人がまずそこで時間を過ごすというバルセロナのような都市が大きな価値を創出している。
- ・ 上部利用のまちづくりを計画し立案していくことは、駅前広場や道路の問題にも連結している。
- ・ 下北沢らしさを失わない中で、防災、災害の時に集まる場も困っているという声も重く受け止めたい。
- ・ 40年やっていてなるべく早くやってほしいという声も受け止めたい。
- ・ 3月11日を経てまちづくりが変わったというひとつの方向性を、この上部利用の中で小田急電鉄とも話し合いながら持っていきたいし、世田谷区の案はこうなので小田急電鉄さんはどうですか？というやり取りを、密室ではなくみなさんにも時折きちんと出しながら進めていきたいと思う。
- ・ 基調講演の涌井さん、パネリストのみなさま、ありがとうございました。